

小林芳文・大橋さつき 著

『遊びの場づくりに役立つ  
ムーブメント教育・療法  
—— 笑顔が笑顔をよぶ子ども・子育て支援』

明治図書出版／B5判並製120頁／2010年12月発行／  
ISBN978-4-18-065998-2／2,460円（税抜）



梅原利夫 所員／現代人間学部教授

「チーム和光」で創られた、分かりやすく笑顔あふれる作品

—— 和光大学関係者で創りあげた作品

楽しく分かりやすく、読んでいて自然に笑顔が増す作品である。表紙絵にそれが集約して表われている。子どもも大人も高齢者も、皆で取り組んでいるのは象徴的なパラシュート遊びの様子であり、副題の「笑顔が笑顔をよぶ」場面がやさしいタッチで描かれている。

日本におけるムーブメント教育・療法の第一人者である小林芳文教授と、ダンスムーブメントの開拓・創造者である大橋さつき准教授をコアにした「チーム和光」の皆さんによる共同作業から生み出されたという経過もうれしい。和光大学での地域連携連続講座や「さがまち（相模原・町田）コンソーシアム」プログラム講座など、学生たちが企画に加わり、地域で実践した成果が反映されているのも読み応えがある。

そればかりではない、膨大な実践記録をまとめた大学院生の杉本貴代さん、表紙絵やイラストを描いた卒業生の中村理さんら、学生たちの活躍ぶりがふんだんに表現されている。和光大学につどう「研究と学習の共同」の積み重ねがあって初めて出来上がった本だから、いっそう貴重なのだ。

—— 整理されたムーブメント教育・療法の考え方

第Ⅰ章では、ムーブメントの考え方が18のポイントとして分かりやすく解説されている。アメリカ合衆国で提唱されたフロスティック女史によるムーブメント

教育 (Marianne Frostig, *Movement Education*, 1970) が小林氏らによって日本に紹介されて30年余りになるそうだが、本章にはこれを理解する上でのキーワードが適切な表現でちりばめられている。

「めざすところは『健康と幸福感の達成』、「遊びが原点—『させる』より『したい』を一」、「『からだ・あたま・こころ』の全人的アプローチ」、「評価ではなく承認の言葉を」、「『いかに』は『何』と同じほど大切」、「強みを活かして楽しく、ゆっくり楽しく」、「創造的な場を共につくること」、「ハッピーは分かち合えば増えるんだ」など、読者をひきつける考え方が示されている。

これらは、講座でのつぶやきや質疑応答や感想文をもとに、小林・大橋先生同士の「日々の語り合いを通して」まとまったものであるという（「おわりに」）。実践による知の発見と創造の足跡を見る思いがあり、本書の導入として18項目にうまく表現されていると感心させられた。

特に「遊びを原点とするムーブメント教育・療法では、子どもの全体を包み込み、『からだ（動くこと）』と『あたま（考えること）』と『こころ（感じること）』の統合的な発達をめざします」（p.12）という解説と図は、「ムーブメント教育・療法」の本質を的確に伝えていると思った。

## —— 誌上で再現、ツールと実践例

第Ⅱ章では、実践に欠かせないムーブメント・ツールが、豊富な写真とイラストで紹介されている。これだけを見ても楽しさや笑顔があふれる活動が開発されていることが分かる。一本のロープ、一枚のスカーフで多様なムーブメントの世界が生み出される。

なかでも象徴的なのはパラシュート遊具である。例えば様々な使い方によって、カラーボールを乗せて跳ねさせるポップコーンに、空気で一杯に膨らまして押さえ込むマッシュルームに、中に入るドームに、子どもを乗せて飛び上がる波乗りになど、楽しいムーブメントが実現できる。これらは私も体験させてもらったが、参加者の協力がなければできないものであり、気持ちを合わせて取り組むとダイナミックで愉快な世界ができあがるのだ。

さらに興味がわいたのは、第Ⅲ章のムーブメントプログラムの実践例である。なかでももっとも分かりやすいのはロシア民話「大きなかぶ」の実践記録である。私が大学で担当している「カリキュラム実践史」という授業でも、この部分を紹介させていただいた。これは多くの国語教科書にも載っている教材であり、子どもたちにも親しみのある物語である。フレーズの繰り返しの面白さや、おじいさんに関係する様々な登場人物が力を合わせる場面など、ダイナミックな動作に人気がある。学校の教室でも文化祭での舞台でも演じられることが多いが、ムーブメント教育・療法の立場からそれに取り組んでいるところにユニークさが表われ

ている。

大きな違いは、国語という教科では小学校低学年の子どもに「物語」の理解や言葉の面白さを認識させるところに重点が置かれるが、ムーブメントでは老若男女がそれぞれの役回りを担い「からだ・あたま・こころ」を駆使して「物語の展開」を楽しむところにねらいが置かれていることだと思う。ムーブメントでは、学生が白いシーツをまとった大きな大きなかぶが登場し、緑のスカーフで頭をおおった芯棒に巻いたロープを皆で引っ張る場面が面白い。ムーブメント教育・療法の独自の世界が築かれているように受けとめられた。

### —— 実践と研究の広がりを期待

これまで見てきたように、本書には和光大学から発信してきた実践がふんだんに記録され、ムーブメント教育・療法の考え方と活動事例の双方が収められている。単なるハウツーものでもないし、難解な理論書でもない。読み手があたかも活動に参加しているような楽しい気分になって味わえる本である。

この不思議で、かつ魅力的な本の世界は、他ならぬムーブメントの世界自身が紡ぎ出す雰囲気が反映していると思われてならない。なぜならそこには、とりもなおさず小林・大橋氏が創りあげてこられた考え方が貫かれているからであろう。

今後の実践と研究の広がりにさらに期待し、注目していきたい。

[うめはら としお]